ゆざわのまち・ひと・しごと

おらがひと

作家 鳥美山 貴子（とりみやま たかこ）さん

「たんぼオーケストラ」で第34回家の光童話賞優秀賞、「ひいばあの手」で第35回家の光童話賞佳作受賞。2021年、第62回講談社児童文学新人賞を受賞した「黒と白の対角線～おりがみおとぎ草子～」が、2022年、『黒紙の魔術師と白銀の龍』に改題し刊行され、作家デビュー。

由利本荘市（旧東由利町）出身、湯沢市在住。2児の母。

「黒紙の魔術師と白銀の龍」
講談社

主人公悠馬は神社の裏山で大きな黒いとかげを捕まえたが、気づくとそれは紙になっていた。しかし夜中、黒いとかげが再び意思を持って動き始めた。命が吹きこまれた折り紙をめぐる、勇気と友情と冒険の物語。

本との出会いは「人との出会い」に似ている

Ｉいつごろから作家になりたいと思いましたか。また、作家になろうと思ったきっかけはありますか。

小学生のころから、自分でお話を作ることが何より好きでした。ただ、実際仕事にすることは現実的ではないと思い諦めました。

それが、出産して子どもたちと過ごし、絵本や童話などにふれる時間が増えていくにつれ、小さかったときの自分の気持ちがよみがえってきて、とにかく挑戦してみようと、書いた童話を応募することから始まりました。

Ｉ家事や子育てとの両立は大変だと思いますが、どのように執筆していますか。

基本はなるべく朝に家事を終え、子どもたちが学校などに行っている間に書いています。家で執筆していると、仕事と子育ての切替えが難しいということはあります。

でも、子どもの奇想天外な発言や行動は、大人にはない面白さがあり、さまざまな常識や知識を身に付けてかちかちに固まってしまった考え方を壊してくれるので、逆にいい刺激を受けています。

Ｉ『黒紙の魔術師と白銀の龍』はどのようなお話ですか。

私の子どもが折り紙で遊んでいるときに、折り紙に命が宿ったら面白そうという発想から生まれたお話です。

カニや龍などのキャラクターがたくさん出てきて、かっこいいバトルシーンもあり、子どもも大人も楽しめる冒険物語です。ドキドキワクワクしながら、ページをめくってもらえたらうれしいです。

Ｉ鳥美山さんにとって、本とはどのような存在ですか。

本屋さんや図書館などで、本棚の前に立ち止まって本を手にすることは、実際にそこに誰かがいるわけではないけれど、人との出会いに似ているなと思います。誰にも言えないことを主人公と共有したり、一緒に何かを発見したり、大切なことを教えてもらったり。本だと安心して、まだ知らない誰かと出会える気がしています。